

「救いの光が臨む時」

イザヤ書 第60篇 1節～3節
ルカによる福音書 第1章 67節～80節

説教 本庄 侑子 伝道師

待降節第三の聖日を迎えました。アドヴェント・クランツに三つ目のキャンドルが灯り、クリスマスが近づいていること、主イエスが再び来られる日が近づいていることを実感します。しかし、そのような教会の歩みとは裏腹に、暗黒の中に座り込む人がいました。

ザカリヤです。ザカリヤは、暗黒の中で座りこむ年老いた祭司でした。当時、子どもを授かることは神様の祝福のしるしと言われていました。しかし、妻エリサベツとの間には子どもが与えられず、2人の人生に暗い影を落としてきました。年老いてからは子どもが与えられるようにという夢も失い、今日も明日もその先も、何も変わらない毎日を重ねていました。

そんなザカリヤに、御使いガブリエルのお告げがありました。祈りが聞き入れられ、妻エリサベツは男の子を生み、その子が救い主の到来に備える人物となるということです。ザカリヤは祭司でしたから、神様の約束に通じていたでしょう。祈りが聞き入れられ、ずっと聞いてきた神様の約束も実現する。それはザカリヤだけでなく、イスラエル全体にとっての喜びの知らせです。しかし、ザカリヤは喜ばませんでした。

ザカリヤは、子どもが与えられないことで、神様の約束の中に自分自身を見いだすことができなくなっていました。自分が信じ、仕えてきた神様の力が、今、エリサベツが身ごもるといふ仕方で働き、生まれる息子を通して神様の約束が実現していく、ということを受け止めることができませんでした。

ガブリエルはザカリヤに「しるし」を与えました。エリサベツが男の子を生む、というお告げが実現するときまで口が聞けなくなる、という「しるし」です。聖書によれば耳も聞こえなくなりました。全くの静寂の中で過ごした10ヶ月の間、神様の力を身をもって経験させられたザカリヤは、御使いの言葉を思い巡らし、神様の約束を振り返ったことでしょう。そして、妻エリサベツの妊娠が発覚し、日ごとに大きくなっていくお腹を見て、神様の力と約束の確かさを目の当たりにしました。ザカリヤを支配していた諦めという暗黒は、神様の計画という光のもとに引き出され、日ごとに明るく照らされていきました。

ザカリヤは、神様によって創り変えられまし

た。信仰を告白する言葉が与えられ、聖霊に満たされ、ほどけた口で開口一番に発した言葉は「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。」(68節)でした。イスラエルの民が神様を賛美するとき、繰り返してきたフレーズです。ザカリヤも何度も耳にし、また口にしてきたことでしょう。しかし、神様の力を目の当たりにし、神様の計画の中に置かれ、用いられている自分を知ったとき、同じ言葉が改めて口からほとばしり出てきたのです。

ルカによる福音書は、このザカリヤの話から始まり、その後も、神様の約束の中に自分を見いだせずにいる人々に光を当てます。神様が諦めの中に座り込む人々に光を照らし、ご自身の約束の中にいることを知らせるあわれみの物語です。

《ザカリヤの預言》の最後(78～79節)は、神様のあわれみを証する言葉です。イザヤ書からの引用であり、よく似た言葉がイザヤ書全体に散りばめられています。イザヤ書が成立するまでの数百年にわたる歴史の中で、イスラエルの民は何度も諦めの中に座り込んできました。しかし、時代の節々に、同じ神様のあわれみの光が臨みました。

私たちもこの光を知っています。礼拝のたびごとに、諦めという暗黒が神様の計画という光の中に引き出され、諦めが信仰へと変えられてきました。私たちはまた、ザカリヤが経験した静寂も知っています。礼拝の間、口が閉ざされ、ただ神様の言葉だけを聞く静寂です。

神様の力は、日ごとに大きくなるエリサベツのお腹を通して、ザカリヤに働きかけました。私たちも、同じ神様の力を目にしています。次週、2人の兄弟が罪の赦しの洗礼を受ける予定です。神様の力が働いて大きくなる教会の姿を、目の当たりにすることとなります。聖餐の食卓を共に囲み、神様の計画の中を歩んでいることを目で見て、手で触れて、味わいます。

アドヴェント・クランツの光が週ごとに明るさを増しています。私たちは神様の約束のただ中にいます。終わりの日に向かう神様の計画と無関係ではありません。救いの光が臨む時、私たちもまたザカリヤが口にした歌を歌い出すのです。「主なるイスラエルの神はほむべきかな。」

(記 本庄侑子)